

神話への転換を果たした『物語の復権』

——中上健次の『十九歳の地図』から『千年の愉楽』を読む——

上田 譽志美

はじめに

私を「中上文学」に導いたのは、関西大学文学部哲学科の同窓故大森豊人氏¹であった。彼は、私が「部落問題文芸」²に興味を持ちはじめたとき、逸早く「藤村」も重要だが、君の立場として「中上文学」を避けて通ることは許されない」と指摘した。そして、その彼がそつと手渡してくれた中上氏の作品である『紀州——木の国・根の国の物語——』（朝日新聞社刊）は、彼の形見となった。それは一年後の死の訪れを知る由もない一九八三年なお肌寒い初春のことであった。彼の忠告は、誰よりも私の「出自」を知る者の一人として当然過ぎることであった。

その時既に、私は、「朝日ジャーナル」誌上における、中上氏の「部落民宣言」³とも受けとれる安岡章太郎氏や水上勉氏との対談が目にとまり、それ以降、中上氏の作品を読み漁ってもいた。また、後に詳述するように「部落解放研究所」の友人から、中上氏の生まれ故郷新宮での「部落青年」の組織化の試みとその顛末、そして、アメリカへの脱出の足跡を聞いてもいたが、何故か、そこから目を背け、切り込み得ない何かを感じていた。しか

し、『破戒』研究で、お茶を濁そうとする私を、大森氏は許さなかった。私は重い足取りながら、部落解放同盟大阪府連池田支部の南健司氏とともに、再度「中上文学」に手をつけはじめた。組織内でも評価の高い支部機関紙『荆冠旗』に、南氏が「中上健次論」を意欲的に掲載するのに引きずられるようにしながら、私はついていた。

かつて、中上氏は、柄谷行人氏との対談『小林秀雄をこえて』の中で、次の様に明言した。

『明治維新から現在までこの百幾年の時間は中に敗戦、占領という事態を含んでもなおかつ人間中心主義、「文学」主義の横行する時代だったのである。たとえば花袋、たとえば藤村。「破戒」が何故、穢多であるという告白をもって終わらねばならなかったのか？ 私は世の文学研究家や批評家と違い、瀬川丑松のその告白を作家島崎藤村の衰弱であると思うし、穢多とは社会の法や制度であり、瀬川丑松が背負う差別Ⅱ物語である事を考えると、つまりそこで藤村がやった事は、法や制度、物語を人間中心主義、「文学」主義におとし入れたのである。』

物語、法、制度から階級をかくし、差別をかくしたのはこの時からである。物語、法や制度の持っている機能とはまったく逆の人間中心主義、人道主義が小説であり、文学であると言われて来たのはこの時からである。私は、多くの「藤村論」や「破戒論」に目を通してながらも、この箇所ほど溜飲の下がる思いを経験したことはなかった。さらに、中上氏が彼の小説の舞台を、『初めて言うので驚くかもしれませんが、被差別部落を原基として多くの小説の中で構成されたもので、その小説上の路地とは現実と違い様々な物語の錯綜する場所であり、運動の場所であり、交通の場所である』と「路地」について語っているのを知るとき、ある種の戸惑いを覚えながらも、私はその作品の上に自らを重ねていった。

以下の一文は、故大森豊人氏に対する鎮魂の思いと南氏らとともに「中上文学」から多くのものを学び共感し

ながらも、その批判の上に立ってしか自らの部落解放運動を構築し得ないとする「部落青年」の証でもある。

一 芥川賞候補作品『十九歳の地図』

中上氏が、本格的に文壇に認められるようになった作品が『十九歳の地図』である。その主人公の「ぼく」は、新聞配達と、同室者紺野のために自由な時間を持ってないで予備校に籍を置きながらも大学進学を投げ捨てている。そして、「ぼく」は、世間や社会への鬱屈を自己の内部に増殖させつつも、だからといって自己の願望にみあった世界があるわけではない。そんな日々、「ぼく」は、『不快だった。この唯一者のぼくがどうあがいたって、なにをやったって、新聞配達の少年という社会的身分であり、それによってこのぼくが決定されている』⁸ ことに対してたまらない思いで、世間や社会の不満を抱いていく。先ず、「ぼく」は、ノートに配達地区の地図を描き、「刑の執行」をすべき家に×印をつけ、それらの『うまいぐあいにこの社会機構にのっかって生きている人間』⁹ に脅迫電話をかけてまわる。しかし、何が返ってくるわけでもなく、感傷に浸ることもできない。「ぼく」は、『立ちあがった。ぼくは犬ではなく、人間の姿に戻り、それでもまだ犬のように四つんばいになって犬の精神と対峙していた気がしていた。犬の精神、それはまともに相手にしてもよい充分な資格をもっている気がした』^{10①}。そして、「ぼく」は、『この街を、非情で邪魔なものがかけまわる』^{10②} 心境である。そうした感情の中にあつて、亭主と喧嘩ばかりしている「かさぶただらけのマリアさま」の声と同室者紺野の鼻で笑う仕種に『不意に、ぼくの体の中心部にあつた固く結晶したなにかがとけてしまったように、目の奥からさらさらしたあたたかい涙』¹¹ が流れだした。「ぼく」は、とめどなく流れだすぬくもった涙に恍惚となりながら立ち尽くすのであった。

そのとき社会の底辺からの怒りは、人間の根源からの声となって《世間にはおまえたちが忘れてしまったものがいっぱいあって、いつまでもおまえたちの寝首をかこうとしているのだ》¹²と響き渡る。

この『十九歳の地図』には、『岬』や『枯木灘』の小説をいろいろる血縁、地縁の複雑さが直接的には描かれてはいない。出口のない青春の鬱々とした作者の思い入れが、体制への個人主義的、無政府主義的な反抗として万感込めて描写されている。といっても、性も暴力も噴出の方向性を見出し得ず、閉ざされたままの青春があるばかりである。それにもかかわらず、『十九歳の地図』には、見せかけの民衆像を引き剥がす迫力がある。今日、市民社会の発展が既にその内実を喪失しながらも、なお、私たちを支配する現実に対して、同小説には敢然とした作者の怒りの表明がある。そして、作者のいう、「非情で邪悪なもの」としての「ぼく」は、この市民社会に対する過激な異物として存在する。それは、紀州の辺境で複雑な人間関係と貧困の中で育った作者そのものであり、その思い入れは、何としても発露されなければならなかったのである。

この小説の「ぼく」は、未だ「狭山闘争」¹³の敗北感を拭い得ない「部落青年」に共感を与えずにはおかなかったし、「差別裁判」への怒りと重層するものがあつた。しかし、松本健一氏が同文庫で解説をしているように『十九歳の地図』は、次の様な弱さをも持ち合わせていた。

《たしかに中上は、「十九歳の地図」のなかに、かさぶたのマリアさまを登場させている。しかし、その「死にたくとも死ねないのよ」、というマリアさまの叫びは、実在感にとぼしい。これは、「暴力」の発生の根拠に対する洞察がいまだ十分でなかったからであろう。かくして、中上はその後、一方で、「暴力」の発生の根拠をより深く明らめようとし、他方で、その「暴力」を救済、解消する土俗なり、「自然」なりに深入りしていったのはなかるうか》¹⁴というような、後に詳述するように部落解放運動とは、全く逆の構図に移行する萌芽をも『十九

『歳の地図』は、その作品に内包している。そしてまた、中上氏は、自分の内部に宿す現実化できない心情故に歪んだ感情や怨みや「出自」に対する劣等感とその「差別」に対する「裏返し」の差別」をも形成していたように思われる。私は、そういった「内部世界」の思いを繰り込んで、「外部世界」にむかつて突き出していく緊張関係の持続を通じて作品化していく中上氏の創作活動に感動しながらも、一方、『十九歳の地図』が差別からの解放を無意識のうちに転化していく先が果たしてどこに行き着くのか、自問自答せざるを得なかった。その結果、『十九歳の地図』は、小説世界にのみ溺れ込み得ない何かを私に残し続けることとなった。やがて、私の中の「密やかな恐れ」は、『十九歳の地図』に次ぐ、『岬』『枯木灘』を経て、『千年の愉楽』『日輪の翼』の中で現実のものとなっていった。

二 天皇賛美の江藤氏との「対談」

一九八〇年代に入って、中上氏にあっても時代の反映を受けて注目すべき変化が起こってくる。一九七三年六月、『一九歳の地図』が雑誌『文芸』に発表されてから十五年、一九八八年二月出版の河出書房新社の季刊誌『文芸』（春季号）で、「今、言葉は生きているか」と題して、江藤淳氏と中上氏が対談を行っている。二人はそのねらいを次の様などころから入っていく。

江藤（前略）三島さんはもう死んじゃったと。死んだからいなくなっただけだ。だから終わりだ。（中略）三島さんと一脈通じないでもない川端さんという人もいたけれど、三島さんの死後二年目これも亡くなったと。そうすると、ポスト川端でもあるというわけで、残った者たちが適当に、これもチンタラチンタラ

とやってきたあげくのはてが、文芸専門書店の提案をしなきゃならぬ文学は不振になって来た。

(後略)

中上 まったくそうだと思うんです。文学を考えてない文学の専門家が多すぎる。

江藤 ほんとうだ。

中上 僕は、これをいちばん考えているんです。今日は、そのことを江藤さんと話に出るかなと思ったんで

すけどね。たとえば天皇がいま病気にかかられているという、ものすごい大事な時期だと思うんです。

こういうときに、言葉の人間がどんなふうに表示できるかという。(中略)

天皇が言の葉の肉体であるなら、天皇が、ご病気にかかっているというこういう時期に、じゃ何を言葉の書き手である僕等できるかという大きな問が突き刺さってくるんです(後略)。¹⁵⁾

として、「三島の後継者」として中上氏に期待するというのがこの対談の趣旨のようであり、中上氏の方からは、威勢のよい発言が続くとともに、江藤氏が最近さまざまに発言している天皇イデオロギーに誘い水をかけている。それに答えて、江藤氏は次の様に述べている。

江藤 そうですね。天皇という存在も、これもすぐれて共時的なものですからね。折口信夫先生の所説によ

れば、天皇のお身体というのは変わっていくという、歴代ですね。だけれど天皇霊というのがあって、崩御された瞬間に天皇霊が新帝につくんだという点では、天皇霊というのは不変である。¹⁶⁾

中上氏はそれに応えて、いみじくも自分の最近の変化を次の様に告白する。

中上 それは僕もかわっていることです。まさに声の問題です。いつも思うんですが、僕の主人公というのは、ほとんど天皇を書いているみたいなのです。超物語ですからね。僕が書いているのは。

江藤 『千年の愉楽』だって……

中上 全部そうです。いちばん書きたいのは超ヒーロー、スーパーヒーロー、というのは天皇ですよ。これは折口を引くまでもなく、神話、民話や物語の中で言う流され王とか貴種流離譚というのは、貴種が流されるという、そのことですからね。それは僕が書いているのは、天皇のことしか書いてないですよ。どんなにやっても日本でものを書くかぎり、この……つまり……

江藤 避けられない。

中上 避けられないです。それは日本武尊が、困難に会う条りが神話にあります。どんなパターンでも、秋幸（『岬』『枯木灘』の主人公―筆者注）がどうであれ、日本武尊の定型から逃がられないんですよ。これこそ言の葉の呪縛ですよ。それを呪縛と取るか、愉楽と取るか、その違いですね。僕は昔は呪縛と取って、あがいていたんだけど、いま四十歳を越えると、愉楽と取るというぐあいになってきたんですよ。¹⁷

さらに、江藤氏は、十一世紀の『源氏物語』を引き合いに出しながら増幅させていく。

江藤（前略）そうすると、日本語という言葉、これは、もともと文字を持たない。あなたの言われたとおり声の言語である日本語の原義に立ち戻れば、やっぱり天皇という存在が中心にあって、それを中心に置いて、それとの距離関係で表現を違えていくと、人称代名詞がなくても人間関係がきちんと表現できるようになっている。そういう言語の体系ですね。どんなに欧文脈の入ってきた近代の国語といえども、その形態は基本的にはちつとも失っていない。（後略）¹⁸

といい、そして、今日の文学の行き詰まりを解いていく方法がある、と次の様に予言者のにいつている。

江藤　　そうですよ。天皇におけるあらゆる共時性を吸い取りさえすれば、文学は衰退しないだろう。

中上　　はい、そうです⁽¹⁹⁾（後略）。

そこで、江藤氏は次の様に戦後文学を総括する。

江藤（前略）磯田光一君が生前やつていた小学館の全集ね、僕のものまで載せてくれるって交渉に来たんですよ。そのとき言っていたのは、高橋英夫と二人で実務をやって、「昭和文学全集」というんで、昭和になってからの作品を選んでいったら、七割が戦前の作品で、戦後は三割弱になっちゃいましたよ、ってね（中略）。

それが、四十三年目になり、四十四年目になり、四十五年目になるにつれて、さらに二割に減り、一割五分に減っていくんじゃないか。⁽²⁰⁾

と江藤氏は戦後文学の低迷ぶりを嘆きながら持論をすすめ、要するに彼は、今日の文学の桎梏を脱するためには、「言葉の肉体」を持っている天皇思想（天皇の共時性）を取り入れなければならないと主張する。

三 「天皇の共時性」の産物としての『千年の愉楽』

「天皇の共時性」という造語で語られ、対談で中上氏が「ほとんど天皇を書いている」と言及する『千年の愉楽』という作品とは、如何なるものなのか、以下にみると。

この作品は六篇からなっている。紀州にある「路地」に生きる人々が、「土方」であり、盗っ人であり、香具師であり、戦中「満州」や「支那」をうろつき、戦後、南米への集団移民を夢みる新興の「ヤクザ」であったり

する。彼らの生涯は、勤労をいとおしみ、利那的で、性にのめり込む動物的な生活、加虐的、自虐的な生き方、ヒロポン、バクチ、窃盗、殺人、情交というあらゆる「極道の世界」に短い生命を終える。その宿命的同時いえる「狂気」の世界を、「路地」でただ一人の産婆「オリユウノオバ」の語りを通し、中上氏は「愉楽」として描いている。そして、作者の描く『千年の愉楽』の基調は、どこまでも土着的な、土俗的なかたちのそれである。例えば、序章の「半蔵の鳥」は、『半蔵は二十五のその歳でいきなり絶頂で幕が引かれるように、女に手を出してそれを怨んだ男に背後から刺され、炎のように血を吹き出しながら走って路地のとば口まで来て、血のほとんど出てしまったために体が半分ほど縮み、これが輝くほどの男振りの半蔵かと疑うほど醜く見える姿でまだ小さい子を二人残してこと切れた』²¹といった長い文体ではじまる。

さらに、次章の「六道の辻」においては、「高貴な汚れた血」を持つ「中本」の一統の男たちの生死を彼らを取り上げた産婆のオリユウノオバを通して、「中上文学」は、次の様に「理念」にまで高められる。

《確かに世間の親らのようにオリユウノオバには人の物を盗んではいけない、人を殺めてもいけない、殺傷してもいけない、という道徳はあたうる限りない。何をやってもよい、そこにおまえが在るだけでよい》²²といった思いがあるだけであった。彼女は《どうせこの世がうたかたの夢で自分一人どこまでも自由だと思っても御釈迦様の手のひらに乗っているものなら何をやって暮らしてもよい》²³とと思っていた。

中上氏は、以上のようにオリユウノオバに仮託して彼の思想を語らしめている。作者の描くオリユウノオバは、「路地」のただ一人の産婆として人間の生に立ち合う者であり、同時に、夫である毛坊主の「札如さん」が存命中は、彼を介して《オリユウノオバは字というものを一字として読めなかったが、夫の札如さんの読む御経の文句はそらんじていた》²⁴。このように、中上氏は、オリユウノオバに書き言葉以前の「語り」の位置を保障するこ

とを忘れてはいない。彼女は《路地》の血が受け継がれることに仏の慈悲を感じていた⁽²⁵⁾といわれるように、このオリュウノオバの無限贖罪（慈悲）によって「中本」の一統の行状は、道徳以前の無垢な行為として捉えられている。それ故に、『千年の愉楽』は、既存の価値観を超えて貴種の相貌を帯び、《悪そのものを描かずに、ただひたすら神仏への傾斜をみせる作品⁽²⁶⁾》となっている。そのとき、被差別の場所である「路地」は、《狭い城下町にできたもう一つの国のように、他所との境界はし切られて》⁽²⁷⁾いる「異界」や「異国」に連なる場として新たに生成されるのであるが、『千年の愉楽』は、作者が《この一連の作品を書いた眼目の一つが、生きる根拠を引き裂かれた人間の悲哀を見据えることにあったとしても、なぜ仏様につながる人物を設定したのか》⁽²⁸⁾という疑問の残る作品となっている。

そして、『千年の愉楽』の思想がはっきりとあらわれてくるのは、終章の「カンナカムイの翼」にでてくる「達男」にかかわる話においてである。「達男」は、十六歳のとき、紀州の「荒くれ者」たちとともに北海道の釧山に流れてゆく。彼は釧山でアイヌの「若い衆」と意気投合し、《丁度釧山に流れて来ている朝鮮人の釧夫らが、騒ぎを起こして待遇を変えさせようとしている》⁽³⁰⁾のを知り、その先頭に立つ。しかし、結果は朝鮮人らも紀州人らも動かず、その場で二人とも逮捕されてしまう。そして、釧夫らの嘆願で出所し、ひとまずコタンに戻ると、アイヌの「路地（コタン）」の家々を「役人」と「警官」が搜索し、「祭壇」をひっくり返して、ウップの老婆は「そのうち他の地区の改善住宅に移れ」と脅かされていた。⁽³¹⁾そこは、「電力会社」のダム建設予定地になっているのだった。

敗北し、挫折した「達男」と「若い衆」は、《胸毛があるほうがいいのか桃色に光り汗が甘く匂う方がよいのか確かめろ》⁽³²⁾①②というように「女郎屋」に逃避し、「若い二人」は、《路地のある紀州と環境のまるで違うそこに同

じような路地（コタン）があり、同じ宿命を持って生まれた事^{33②}を確かめ合うのだった。その後、「達男」は「朝鮮人の崔と申」が「道庁」から買収されていたことに怒って、「申」を傷つけた。そして、「達男」は、「申」の仲間たちや流れ者に報復をうけ、宿命通り短命のうちに息絶えた。作者は、「達男」を殺した「朝鮮人」や「紀州の荒くれ」の行為を次の様に描写する。

《鉾山の暴動から道庁を乗っ取りに行ったり、新聞社を打ち壊したりするより、二人を殺そうとするその計画の方がはるかに自然な流れだった。申のとむらい合戦で朝鮮人鉾夫は張り切るし、紀州の荒くれらも二人を殺してしまえば後々脅されずにすむ。警察もその暴動は見のがしてくれるはずだった³³》と。

やがて、「達男」になりましたアイヌの「若い衆」が、紀州の「路地」にあらわれ、オリウノオバに《あの分も生きたらと思って³⁴》と目にたまった涙の滴を指で押さえ、《オバ、俺はもう何でも見て来たんじや³⁵》と「達男」の声でいうとオリウノオバはまた涙を流した、というところで小説は終わる。

私は、中上氏が被差別部落に生まれ、「土方」の生活を知り、下層の人々の間で育ったことを描くことに共感した。また、《他所の差異としてある路地が、そして、路地の若衆らが、「平等思想」という法、制度の物語が生み出す差別被差別の構造に「ひっかかって」しまっていることに対して、オリウノオバは「腹立ち、絶望³⁶」している》が、私は、このような登場人物の姿に共鳴し、とりわけ、「地域」における「聞きとり」を通して、オリウノオバに仮託した中上氏の「思想」を追体験しようとした。さらに、初期の『十九歳の地図』にみられる大都會の片隅で、新聞配達をして浪人生活を送っている青年の、世間の人々の偽善的な同情や蔑視に対する個人的な、行き場のない作者の復讐の思いを、「差別への怒り」の中に止揚しようとした。しかし、『千年の愉楽』には、「道庁」や「電力会社」「鉾山」への無政府主義的な反抗はあっても、朝鮮人鉾夫らへの拭い難い大衆蔑視

が隠されているように思われてならない。そこには、急進的、小市民的、無政府主義的な気分、思想、生活形態の反映があるだけである。そしてまた、『千年の愉楽』は、そうした没落小市民的な反抗が、挫折した七〇年代から八〇年代にむかう中で、どうしようもなく頹廢していく世界の描写に力点がおかれてもいる。それは、反抗したはずの現実の壁の厚さに敗北し、八〇年代に入って押し出されてくる超現実的な神秘主義を色濃く持った天皇主義への全面的な屈服であり、その賛美でさえある。それ故、私は、『中上健次氏がこの作品で試みようとしたことが、歴史記述でないことはほぼ自明である。それなら、それは物語なのか、小説であるのか。あるいは物語でも小説でもないものだと思えば、果たして何であるのか。そして、作者はなぜこのような作品を書かなければならないと、思ったのだろうか？ これらの問に答えることは、もとより簡単なことではない。明らかなことは、中上氏が決してオリュウノオバではなく、『字の読み書きが出来ない』どころか、現在作家のなかでも最も豊饒な語彙を有する作家の一人であり、『千年の愉楽』は、語られたのではなくて書かれた作品³⁷⁾であるという。ような江藤氏の評価を、どうしても丸ごと肯定する気持ちにはなれない。むしろ、私には、一九七六年五月の『文芸』誌上における川村二郎、坂上弘、佐多稲子の三氏による「読書鼎談」で、坂上氏が『中上さんの文学は、肯定的な文学ですね。確かに爆発的な恨みとか、そういうものがあるようだけれども、中上さんの主人公は社会を改革しようとか、(中略) 否定的なものというのを一切排除してますね。一見、肯定でも否定でもないというような感じで、主人公はつねに内向的に独白しておりますけれども、やっぱり現世肯定ということに関してははっきり出ている。(後略)』と評する方が素直に受けとめられる。

四 「中上文学」に対する危惧

「中上文学」に惹かれながらも、以下の二点において、留意しておかなければならない。

その第一点は、「中上文学」というよりは、むしろ、中上氏の中央文壇における「日常性」を部落解放運動における「われわれの内なる中上健次」として捉えなければならぬということである。

『十九歳の地図』から第七十四回芥川賞（一九七六年）に輝いた『岬』、そして、毎日出版文化賞（一九七七年）、芸術選奨新人賞（一九七八年）を受賞した『枯木灘』、そして、『千年の愉楽』や『日輪の翼』への経緯を振り返るとき、中上氏が主観的にどう考えようとも、そこには、明らかに彼が養成され、登用されていった軌跡がある。一九八四年二月の梅原猛氏との対談集『君は弥生人か縄文人か』（朝日出版社）や一九八八年一月の前記の江藤氏との対談『今、言葉は生きているか』といった中での発言は、それを裏書して余りある。なるほど、中上氏がいう日本の歴史の中でもっとも貶められてきた紀州を舞台に「内なる辺境」から、これまで汗の臭いさえない中央の文壇にはなかった世界を引っ提げて、日本の近代を撃つという手法は、一見過激に見える。しかし一方で、その手法は、今日の総中産階級化した日本人の多くが意識的、無意識的に捨て去った「原始的なもの」の破壊力を拡大解釈する方向に陥ってはいないか？

さらに、その「原始的なもの」の破壊力に居直ることによって、やがて、彼の「出身」を反転させて上昇志向へと邁行的前進を続けていく結果に短絡してはいないか。仮にも、中上氏が、三島由紀夫氏のような貴族主義的な天皇主義ではなく、土着的な、土俗的なものをすくいとって天皇に呪縛されることが『愉楽』であると居直り、それ故に、彼が、より広範な勤労大衆に影響力を持つと期待されているとするならば、そのことが自らの「出身」

を貶めるものであることを、自覚しているであろうか？ もとより中上氏にむけるより、今や私自身の問題としても留意しなければならないことはいうまでもない。

次に第二点目としては、松本健一氏も、『連続企業爆破事件（一九七五年）』という、「反日アジア武装戦線」の手による爆弾事件がおきたとき、わたしは、あッ、これは「十九歳の地図」の作者がおこしたものだ¹⁰』といわれる様な一九七〇年代の初頭に連続的に起こった「連合赤軍」的な急進的、小市民的、無政府主義的な気分、思想、生活形態を反映した「中上文学」が内包しているものに対して危惧を感じることである。

殊に、七〇年代の初頭の時流に、無政府主義的に投機した世代の気分をすくいとり、その挫折した者たちを、八〇年代の「天皇」賛美の神秘主義、土俗的な古代の有霊観を思わせる精霊崇拜にすくい上げ、もっていかれることへの恐れといったものである。私は、どうしても「中上文学」を読み込めば読み込むほどに、そのような危惧を拭い去ることができない。

それ故、如何に「老婆」らの信心の根底に差別と貧困による長年に渡る苦痛がすえられていようと、『千年の愉楽』や『日輪の翼』に見られるような現実から遮断されたところで、血生臭い暴力と淫蕩にふける若者たちの姿が華麗に描かれ、彼らの生きざまが丸ごと肯定されるようなことを、「部落解放運動」に身を置く私の立場から是認することはできない。

とりわけ、『千年の愉楽』の方向を九十度撓め、縦の力を横に、時間を空間へと転換すると、そこに『日輪の翼』の世界が成立する¹¹』といわれる同小説の全体は、『巡礼物語の悪しき模造であり、時間継起に先端と終極を設ける近代小説のイデオロギーへの批判となる。いや、そればかりか、それは物語の姿を仮初に借りることによって、物語の統率者にして、物語の虚構の頂点に位置している天皇を、内側からもう一度とらえ直すことに通じ

る。天皇とは何者か。(中略) 死後に自らの名となるであろう年号の改元を通して、時間に始まりと終わりを告げる者のことだ。では、終わらなきテクストを天皇の前につきつけることは、何を意味しているのか⁽⁴²⁾と四方田大彦氏が衝いている点を避けて通ることはできない。それらの指摘に対して「時間継起設定」については、『岬』や『枯木灘』の延長線上に『鳳仙花』(一九七九年四月)及び『地の果て 至上の時』(一九八三年四月刊)でもって、一応の完成をみている。しかし、『時間の統率者』であり、家系の物語の継承者である父親が不在となった今、いかにして現実のテクストに終止符を投ずることができるか⁽⁴³⁾という矛盾を『日輪の翼』(一九八四年五月刊)は、仮初の終わりを準備することで、とりあえず解消しようとしたに過ぎない。また、『枯木灘』では、事件を構成している出来事に衝き動かされて、まるで彼自身のドキュメントを思わせるものがあつたが、『日輪の翼』では、中上氏の文学的自意識の過剰さ故に、時代が自分のものであるかの如き信念から、自己の神話化に赴かざるを得なかったのではなからうか。

従って、以上のような矛盾を孕んだ『日輪の翼』の行き着くところは、『やっぱしええねえ、天子様ここにおつてくれるさか、わしらクズのような者が、生きておれるんやねえ』と言う。「クズでかい?」ツヨシが訊くと、サンノオバは玉砂利の上で靴をはき、「おうよ、わしら、クズじゃだ。チリ、アクタじゃだ、天子様の他、誰が上で誰が下という事などあるもんか。皆クズじゃだ」といい、ツヨシがそれなら俺もそうかと訊くと、天に太陽が二つあるはずがない(中略)⁽⁴⁴⁾というような描写に終っている。このように描く中上氏は、差別と貧困に目をむけているとは思えない。そこには、老婆らに差別と貧困をもたらした現実社会に対する作者の批判的視点はなく、むしろ、差別意識を色濃く反映した現実社会の全的受認の上になつて神格化された天皇の今日的存在の合理化があるばかりである。だからこそ、中上氏は、「人間中心主義」の文学を否定して、「物語」を復権させなけ

ればならなかったのではなからうか？

その点、蓮實重彦氏と柄谷行人氏の対談『闘争のエチカ』において、蓮實氏が中上氏について次の様に論じているのは、的を射ているように思われる。

《さて、中上健次の場合はどうか。僕は、これから「小説から遠く離れて」で中上を論じるつもりなんだけど、その説話論的な構造はこれまた完璧に物語的な典型と合ってしまう。つまり、彼はそのことに意識的なんだ。大江健三郎も意識してます。つまり、彼らには強固な文学的自意識があるわけで、そこが村上春樹と違う。しかし、時代は春樹のものなんだ。もはや、中上の時代でもなく、大江の時代でもない（後略）》と辛い評価を下している。

柄谷氏も『同書』で、《中上健次は、わざわざ物語を求める必要がないんですね。被差別部落は、本当に出身に関する物語で充ち充ちているわけだから。それに、彼のお母さんは文盲なんです、文盲というのはすごいですね。いわば出来事と物語の区別がない世界ですからね。そういう意味では、彼は本性的に「物語」的ですか。しかし、この「物語」は、リアリズムあるいは近代社会の差別の産物でもある。彼が「物語」というとき、この両義性があることを忘れてはならないだろうと思います。僕の考えでは、リアリズムもまた物語であり、市民社会のイデオロギーです。彼は、この市民社会に活力をいれるために「幻想文学」のごとき物語を編んでいる連中とは違います。中上の場合、「物語の解体」と「物語の回復」が、同時に出てこざるをえないようになっている（後略）》と、さすがに刎頭の友というだけあって、柄谷氏らしい見方ではあるが、兩人とも中上氏が「物語文学」に依拠することに疑問を挟んでいる。さらに、蓮實氏は『日輪の翼』が、「物語」にいきつけない亀裂をおこしていることも、同時に見抜いている。¹⁷⁾

以上のような脈略から考えると、冒頭にもかかげた柄谷氏との「対談」における中上氏の主張する「階級」とは、何を意味するものなのか、理解に苦しみどころであるが、いわゆる「階級的立場」からいうならば、主人公の「出身」階級や現在の所属階級によってではなく、当人の言動が、どの階級の立場を反映しているかを基準にして判定すべきものであることはいうまでもない。また、その際、勿論現在の所属階級についてどういう態度をとっているか、ということが一番の問題である。なるほど、中上氏は下層の人々を彼の作品の素材に取り上げているが、その中味は、中央文壇に対してむけられたものであり、没落小市民や「浮浪」階級の利那的怒りや享樂的な世界があるのみである。中央文壇で果たしている彼の役割は、圧倒的多数の勤労大衆や被差別部落大衆の立場から見れば『共産党神話崩壊後の人間』⁽⁴⁸⁾を社会的に代弁しているに過ぎない、と批判される所以である。

五 「作家中上氏」と「解放運動」の接点

ところで、私は、意識的に本稿において、芥川賞に輝く『岬』、毎日出版文化賞を受賞した『枯木灘』、そして、先行二作品と関連する『鳳仙花』や『地の果て 至上の時』に言及することを避けてきた。おそらく、「中上健次論」をものする者が、彼の代表作を横において論ずる等ということは本末転倒であろう。本音を言えば、それは、私の能力に余るといふことであるが、それ以上に、彼の最高傑作といわれる『岬』（一九七七年）『枯木灘』（一九七七年）から『千年の愉楽』の終章「カンナカムイの翼」（一九八二年）が書かれるまでの間に、大衆運動に責任を負う者として、また、とりわけ「出身」を同じくする者であるが故に、追求し得ない中上氏の「二つのこと」に遭遇したからでもある。

その一つは、彼が『毎日新聞』紙上でも告白しているように、初めての長編『枯木灘』を書き終えて後、もう一度、小説の舞台にした紀州を見詰め直してみようと、朝日ジャーナル連載のルポルタージュ『紀州―木の国・根の国の物語』の取材旅行に出かけた後の彼を取りまく「出来事」である。すなわち、その取材旅行を終え、執筆を終えた一九七八年の二月、連続公開講座の第一回を故郷新宮において開始した事情及び顛末（一九七八年二―一〇月）とアメリカへの脱出（一九七九年九月―一九八〇年一月）についてである。

もう一つは、韓国での長期滞在中（一九八一年二―七月）に書かれ、一九八一年秋号の『韓国文芸』に掲載された『柄谷行人への手紙』と題する長文の手紙と尹興吉氏との対談集『東洋に位置する』（作品社、一九八一年一月）という作品の放つ「被差別者」を逆撫するような「発言」の中味についてである。

前者について、私は『その連続公開講座を純粹に組織の問題だけで、八回で打ち切る事になると、どうして八回で打ち切るのか理解できない、他所目にもみっともないと、その被差別部落の青年らは言った。さらにいつぞやこの紙上（毎日新聞）に書いた連続公開講座の総括の文章を読み違えて、私一人に非難が集中する結果になった』と、中上氏自身も述懐しているように部落解放運動との接点に立って苦闘した彼の足跡を、批判する気にはなれなかった。

もとより、その原因について中上氏は、彼なりに次の様に述懐している。

『最大の原因は、部落青年文化会の内部崩壊である。メンバーに文化を読み変える事も文学の新しい地平も無縁であるし、それよりもまだしもわかり易く人の吐いた差別的言辞をあげつらい、差別語かくしの運動の方がよいという迷妄があったからである。思想を思想として自立させる事の自覚の欠如は、大衆団体であるゆえ仕方のない事かもしれない。部落青年文化会のメンバーと春日町の住民が、新宮支部を脱退し、部落解放同盟春日支部

を結成したのは、連続公開講座打ち切りを決めて、ほどなくの十一月である。

八回の連続公開講座は小説家である私に関しては実り多い。(中略)だが、またしても、敗れた、という実感がある。その事について語るのではなく、深く考えたい⁽³⁰⁾としている。これらの自己の運命を「兄弟姉妹」の解放運動と切り離し、押しやっている見解と、「東京仕込み」を紀州に持ち込もうとする姿勢は気になるところであるが、にもかかわらず、生まれ故郷で、「差別の現実」に学び、差別の現実に戻そう」とした彼の「試み」には共感するものがある。

後者については、柄谷氏宛の体裁をとった長文の『手紙』に、彼の韓国への「思い入れ」とは別に判断不能な発語が連発⁽³¹⁾され、特に、金芝河氏との対話や言動をどこまで信頼していいものか、理解に苦しむ。また、中上氏が「ねじれ」を起こすのは、部落問題にのみに限ってはいない。『東洋に位置する』では、冒頭から「朝鮮問題」について問題性の多い発言が続いている⁽³²⁾。

以上のことが、「中上文学」の核心(『岬』『枯木灘』)へ迫ることを私に先送りさせた理由でもある。いずれにしても、無政府主義的な青年の反抗を描いた『十九歳の地図』から天皇を描いたという『千年の愉楽』の間に位置する「物語文学」としての「中上文学」の至宝である『岬』『枯木灘』を支える理念が、「自然」と「口承世界」にあることは一般的に周知されているところである。すなわち、『十九歳の地図』から『千年の愉楽』へ架橋する核心を構成するものが、この二つの柱立てであり、「自然」と「口承世界」こそが、「地縁」「血縁」の地図に連鎖され、一切の矛盾と煩惱を吸収した「神話的」「絶対的」「世界的」「密教的」空間としてある。そこには、中上氏の差別の原体験が、当然横たわっていると考えざるを得ず、同時に、彼の「差別体験」こそが、彼の作家行為を衝き動かしている重要な指標の一つとも考えられる。前述したように中上氏が、部落解放運動との接点を

求めたのも事実であり、それが、文学活動の延長線に過ぎないとしても、その脈絡を求めることは「中上文学」を理解する上で不可欠のことに思える。

おわりに

私は、あの『十九歳の地図』の「ぼく」が不可視の「国家」と、今なお、対峙していると考えたいし、現在も中上氏がそれらと向き合っていることを信じて疑わない。なぜなら、彼の作品世界のあの「醜悪な場面」を追求してやまない中上氏の「内面」とは、同時に彼にとってそのように自覚されているが故に「解体」「破壊」されなければならない筈の「もの」であり、決して「自然」や「口承世界」に解消できるものではない筈である。私は、「中上文学」が「ぼく」自身を「異化」として衝き出すことによって、成立していると思いたいし、そうすることによってのみ、状況と対峙する不可視の国家（観念）に通じる文学たり得ると考える。それ故、中上氏の作家行為が、彼の「内部構造」とその作品が依拠する根拠こそ問題であり、「物語」の中に自分を塗り込める視点こそ問わなければならない。従って、彼のいう「自然」と「口承世界」に自らの「密室」を血肉化できないとすれば、また、そのような「自ら」を自己否定的に解体できないとすれば、さらには、「物語」の中に自らを負の「三島」化として塗り込めてしまうとすれば、この国の「差別構造」を支える規範を自ら補完、回復することになってはしまわないだろうか？ それに対する私の不安を裏書するように、前述の「対談」では、江藤氏との次の様な主張の場面に会おう。

《前略》 敵をいい加減に扱うなって、中野重治が言った。中野重治という共産党の中央委員にまでなった人が、

「五勺の酒」を書いて占領軍の検閲で削られた。僕は「昭和の文人」に書いたけれどね。あの作品で、共産党がこの憲法のインチキさを最初に立って糾弾しなくてどうするかと言った。

そしてニュース映画を見ていたら、千葉の行幸のときに体育館のギャラリーに座っていたやつが、天皇が出てきたらゲラゲラ笑ったと。そのゲラゲラという笑いの卑しさを中野重治はものすごく糾弾している。中野重治という人は、偉いもんだ。やっぱり言の葉で生きていたのだね（後略）⁵⁴と江藤氏は、『五勺の酒』を全く逆の立場から取り上げ、「敵をいい加減に扱」っている、その後の「民主」的文学を、中上氏に嘲笑してみせるのである。

中野氏の当該作品は、果たして、そのような「視点」から展開されているのであろうか？

中野氏は、小説の中で主人公の校長を通して、新憲法の発布によって人間天皇の宣言がなされたとき、皇居に全国から何万人という民衆が動員された問題を指摘している。そして、中野氏は、その後のニュース映画で天皇が千葉への行幸のとき、涙する女学生に向かって《かしこい、僕が敬意さえ抱いている僕の中学生ら》が、ゲラゲラと彼女たちを見下すように笑った態度は解せない、《ダルな笑い》より《千葉の女学生に手紙を書け。先生・生徒両方へ書いて討論しろ。（中略）ぶざまに泣く女学生らに異性として腹を立てるべきなのだ》⁵⁵といているのである。すなわち、中野氏は、そんな見下す暇があれば、その涙する女学生を変えることに、なぜ心を砕かないか、といわゆる「左翼青年たち」に警鐘を発しているのである。

この『五勺の酒』にかかわる江藤氏との対談の情景は、『差別、その根源を問う（上）』における、野間宏氏や安岡章太郎氏が、中上氏に対して「魯迅」が「メスをペンに持ちかえる」契機をなしたといわれる、その短編『藤野先生』の当該箇所⁵⁶を引き合いに、以下の様に語る場面と対照的ではないか？

《野間、（前文略）魯迅は、日本人に差別されている中国人、外国人に差別されている中国人を中国で見つくし

たが、同じアジア人である日本人によって、中国人の受けている差別の深さを、日本で知りつくしたのですよ。そういう点から考えると差別されている中国国民を治す医者は文学者である、ということになるでしょう、自分も含めて。その発想は、じつに深いところから出ていて、それ故に、魯迅の文学は、じつに先鋭なのですよ。

(中略)

この前も大岡昇平さんを囲んで話したときに、人肉食の問題が出たけど、中国人は人肉を食ってたわけでしょう。(中略) 魯迅は『狂人日記』で、そういう中国人の「最低条件」ともいえるべきものを押えるわけです。しかも、そいつが自分にもあるというところまで確実に下がっていく。差別される中国人と人肉食との間に自分の身を投げ入れて、そこから出発する。

安岡、そうですね。だから、彼の被差別感と愛国心とは同じものですね。(以下略⁵⁷)とある。

私は、江藤氏との対談における中上氏の相槌が「魯迅」のそれであって欲しいし、また、『地下茎』で新日本文学新人賞を受賞した「解放新聞編集長」の土方鉄氏が、最近、同紙上⁵⁸で、《中上が、後年、書きつづける、いわゆる路地の世界は、この作品にその原形をみせている。もっとも、路地が環境改善で、姿を消した今日を、いかに描くかが、彼の今後の課題だろう》と『岬』にかかわって詳述しているように、戦後部落解放運動、わけても「行政闘争」の中で消失した「路地」のその後を作品化されんことを、私も願ってこの稿を閉じたい。

〔註〕

- (1) 一九八四年二月二日、享年四二歳で逝去した。船場中学校時代から、山本義隆氏(元東大全共闘議長)と共に、その才能を期待され、高卒後、直ちに商社に引き抜かれるも、学問研究の情熱を捨て切れず、二年

後関西大学文学部哲学科に進学、大学院修士過程では故田中熙名誉教授の指導を受けた。修士卒業後は、大阪で六指に入るといわれた北浜の料亭『北水』を畳み、その跡地に創造空間『タキオン』を主宰し、様々の分野の芸術家を育てようとする一方、『オリエンタル・ウインド』―『東洋の風に乗せる自然たち』―イベントとチャリティ展（一九八二・一一・二三）を企画。全国ナショナルトラスト運動の先頭にたち、『新しい生命体に期待して』と題する『天神崎保全ナショナルトラスト運動』の『呼びかけ文』は絶筆となった。

（2）『部落問題文芸』の概念規定は、大きく二通りに分かれる。一つは、桑原律氏によるものであり、もう一方は、津田潔氏によるものである。

前者すなわち桑原律氏は、『部落問題研究』（季刊、一九八七・一〇・九二号―特集―第二四回部落問題研究者全国集会報告〈部落問題研究の現段階〉一九八頁）において、次の様に規定する。

部落問題文芸の研究は、『もとより「文学論」を抜きにしてはその意味をなさないが、私たちが部落問題文芸を追求するのは、「部落問題の解決に資する」ためにという目的があり、「文学論」の確立だけをめざすものでないことを前提としたいと考える。

その理由は、「文学論」のみに限定するならば、いやおうなく「この作品は文学としてすぐれているかどうか」という狭い視野で論じあうことになり、究極的には「純文学論」に自らを追いこんでいくことになるのを避けたいからである。また、仮に「部落問題が主テーマになっていなければ、それは部落問題文芸ではない」という定義づけをすれば、発掘された二百作品の多くは、研究の対象外になってしまう愚に陥る」とするものである。

一方、後者すなわち津田潔氏は、『部落問題研究』（季刊 一九八八・九、九五号―特集―第二五回部落

問題研究者全国集会報告〈文学作品の中の「部落」一八三―一八四頁〉において、次の様に規定する。

部落問題文芸とは、〈近代日本文学を涉獵してその中から大なり小なり部落や部落民をとりあげている作品をリストアップし、それらをまとめるために便宜的に使われているようである（中略）

部落問題文芸という表現は、ひとつの傾向文芸としての部落問題文芸という意味をこめて使っているのではない。そのことは北川氏自身が〈部落問題をあつかった文芸といっても、それは、そういう内容の文学だけが、他の文学作品や文学思潮と全く切りはなされたものではないし、（中略）その系列だけで自己発展していることはない（北川鉄夫「部落問題文芸ノート 1・関係作品について」『荆冠の友』五六号、一九七一二）といっていることにあらわれているし、何よりもその『選集』に収録されている作品がひとつの傾向文芸としての部落問題文芸という範疇でまとめることが無理なことにもあらわれている。（中略）すなわち、部落問題文芸とは文学における部落問題研究の対象になる文芸作品を巾ひろく指しているに過ぎない〉というものである。

なお、一九八七年十一月一日、在日朝鮮人の文学者の新しい動きとして、李恢成氏を代表とする、季刊、在日文芸、『民済』創刊号が発行された翌年、一九八八年七月一日、『部落問題と文芸』創刊号が、北川氏や桑原、津田阿氏を中心に「部落問題文芸作品研究会」から発行された。

(3) 〈このあいだ韓国へいったら、韓国には「ベクチョン」っていう被差別民がいる。多くは被差別部落出身の作家ですが、多くの目に、韓国自体が一個の巨大な被差別部落みたいに見える、それだけで胸にジーンときて、好きになってしまうことがあるんです（後略）〉（朝日ジャーナル、『ものいわぬ歴史を呼び戻す営為』鼎談、〈人間の「根」に踏み込む〉（上）、一九八二・三・一二、一七頁）

- (4) 一九八三年から三年間、「国文学史特殊講義」を非常勤でお願いしていたおり、「破戒論」に終始していたことを、大森氏は怠慢だと指摘していた。
- (5) 故南広好元池田市議会議長の三男として一九五三年生まれ、現池田支部書記長として活躍。解放運動とともに執筆活動や映画製作（『心のかけ橋』一九八四年製作）を手掛け、一九八八年二月一日、彼が編集する支部機関紙『荊冠旗』（一九七三年二月二〇日創刊）は五〇〇号を達成した。
- (6) 柄谷行人氏との対談・評論、『小林秀雄をこえて』、河出書房新社、一九七九・九、一四二―一四三頁
- (7) 『中上健次・1978―1980・全発言Ⅱ』所収、桂秀実との対談、「アメリカへ―破壊への衝動」、集英社、一九八〇・七、四四三頁
- (8) 『十九歳の地図』、河出書房新社、文庫、一九八一・六、八七頁
- (9) 同書、一〇九頁
- (10) ①②・同書、九〇頁
- (11) 同書、一三八頁
- (12) 同書、一〇一頁
- (13) 一九六三年五月一日、埼玉県狭山市で女子高校生が誘拐・殺害された事件、「部落」に対する予断と偏見によって別件逮捕、「解明されない事実」があることを認めながら、事実審理を開かず、一九八二年二月七日東京高裁は再審請求を「棄却」した。
- (14) 『十九歳の地図』所収―著者ノートにかえて―「同時代の爆弾」、松本健一、河出書房新社、文庫、一九八一・六、二二二頁

- (15) 江藤淳と中上健次の対談、「今、言葉は生きているか」、河出書房新社、『文芸』、春季号、一九八八・二、
一三四頁

(16) 同書、二三五頁

(17) 同書、二三七頁

(18) 同書、二三九頁

(19) 同書、二四〇頁

(20) 同書、二四三頁

(21) 『千年の愉楽』 河出書房新社、一九八二・八、三一―三三頁

(22) 同書、四八―四九頁

(23) 同書、六〇頁

(24) 同書、二〇七頁

(25) 『中上健次論』、明石福子、編集工房ノア、一九八八・一〇、一八四頁

(26) 同書、一八三頁

(27) 『千年の愉楽』 河出書房新社、一九八二・八、三七頁

(28) 《路地が、他の村落共同体と違い路地それ自体で宇宙モデルを持ち、国家モデルを持つのは、排除され強いられて山の裏側に行ったというその点にある》（最新エッセイ＋対談、1982―1985、『オン・ザ・ボーダー』所収―「異界」にて―、トレヴィル、一九八六・六、八頁）

(29) 『中上健次論』、明石福子、編集工房ノア、一九八八・一〇、一七九頁

- (30) 『千年の愉楽』 河出書房新社、一九八二・八、二三三頁
- (31) 同書、二二四頁
- (32) ①②・同書、二三三頁
- (33) 同書、二三六頁
- (34) 同書、二四二頁
- (35) 同書、二四三頁
- (36) 『國文學』三三三卷一〇号、所収、「千年の愉楽」論―「語り」の覚醒―永島貴吉、學燈社、一九八八・八、八四頁
- (37) 『文芸』、自由と禁忌、XI「路地」と他界、河出書房新社、一九八三・一一、四二頁
- (38) 『文芸』所収、「読書鼎談」、川村二郎、坂上弘、佐多稲子氏、一九七六・五、二〇九―二一〇頁
- (39) 《紀伊半島、紀州とは、いまひとつの国である気がする。まさに神武以来の敗れ続けてきた闇に沈んだ国である。熊野・隠国とはこの闇に沈んだ国とも重なってみえる》（『紀州―木の国・根の国の物語―』朝日新聞社、一九七八・七、一〇頁）
- (40) 『十九歳の地図』―著者ノートにかえて―「同時代の爆弾」、松本健一、河出書房新社、文庫、一九八一・六、二二二頁
- (41) 『貴種と転生』、四方田犬彦、新潮社、一九八七・八、二〇一頁
- (42) 同書、二〇五頁
- (43) 同書、二二一頁

- (44) 『日輪の翼』、新潮社、一九八四、五、二九一―二九二頁
 - (45) 蓮實重彦と柄谷行人の対談『闘争のエチカ』、河出書房新社、一九八八、五、九四頁
 - (46) 同書、九七―九八頁
 - (47) 同書、九七頁
 - (48) 江藤淳と中上健次の対談、「今、言葉は生きているか」、河出書房新社、『文芸』、春季号、一九八八、二、二五四頁
 - (49) 『毎日新聞』夕刊、「賤者になる」、一九七九、八、一八、または、『風景の向こうへ』所収、冬樹社、一九八三、七、二〇〇頁
 - (50) 『毎日新聞』夕刊、「被差別部落の公開講座八回で打ち切りの反省」、一九七九、一、一七、または、『風景の向こうへ』所収、冬樹社、一九八三、七、一九八頁
 - (51) 『セマウル運動を先入観抜きに考えると、文字通り〈新しい村〉運動であり日本にもあった新生活運動でもあるが、それにとどまらず織田信長型の天才的革命家であるこの国の前大統領（朴正熙―著者注）の「根底の不在」を見すえた上の思想運動にも見え、さらに、「根底の不在」のここだからこそ、たとえばアメリカのニューディール政策や日本の農地解放などよりはるかに大きなダイナミズムを、この社会に与えていると見える』『風景の向こうへ』所収、「柄谷行人への手紙」、冬樹社、一九八三、七、七〇―七二頁
- 《驚くのは、反体制の大物と称される人物らが一同に会し、酒場でチマチョゴリの女らをはべらせ、美酒と美食を味わいながら民主主義を説き、大衆が貧苦にあえいでいると弁説をふるっている事だった。何月何日、どこで、誰と誰が、と書いてもよいが、そんな反体制の人々を見ていると、彼らはかつてこの国にあった

た両班の新種であり、きつく言えば端から大衆の実像を直視する気などないのに観念として大衆をつくり出し、民主主義や人権というヨーロッパ経由の「文学」的な口に甘い言葉を操っているのではないかと、疑ってしまふのである。どんな事を言おうと、新種両班が幅をきかす文学的な政治、つまり王朝政治を夢みているのだ、とも私に映る。(中略) 社会が多少のひずみをふくみながらもダイナミックに動きはじめ「交通」しはじめた今、保守反動とは彼らのことを言うのではなからうかと思う(『風景の向こうへ』所収、「柄谷行人への手紙」、冬樹社、一九八三・七、七二頁)

《パンソリや仮面劇について民俗学からの考察、文化人類学からの考察が皆無に近く、学者に訊ねてもただの思いつきの類をしゃべっているだけではないかと苛立ち、韓国には一人の柳田国男も一人の折口信夫も、南方熊楠もないのだろうか(後略)》(『風景の向こうへ』所収、「柄谷行人への手紙」、冬樹社、一九八三・七、七六頁)

(52) 《ケンジは小説家だから金持ちかエスタブリッシュメントしか周りにいないかもしれないが、と芝河が言い出したのは、喜びすぎた青年実業家が一番高いサロンへ行って騒ごうと言ったのを耳にしたせいだろうと今になって思う。何を言うんだ、とその時、何故か私もむきになって打ち返した。あんと違って、俺は地べたにたたきつけられ踏みにじられたところで生を受け、貧困や病気や差別や不平等の中で生きてきた。(中略) 芝河はしゃべりだした。エスタブリッシュメントになろうと思ってもなれない人間、民衆、思いが昂じたのか芝河は私の手を握り people と言ったきり絶句した。私をみつめたまま、涙声で、われわれを embrace してくれるしわれわれが embrace しなくてはならないんだ、と言う(『風景の向こうへ』所収、「柄谷行人への手紙」、冬樹社、一九八三・七、八六頁)

(53) 《中上 (前文略) 韓国人は、自分の国はものすごく後進性があり、おかれているとか思うかもしれないけれども、僕なんかからみれば、いわゆる記号論を勉強している者の眼でみると、「後進性」というそのものの中に、すごいものがあるわけですね。(中略) 昔、それが事実かどうか分かんんですが、誰かが韓国の民家で猫の食器を見て感動して、日本にとって帰って茶の湯につかったという話がありますが、確かにここは猫の茶碗すら美しい。僕が混乱することは当然ですね(笑)(後略)》(『東洋に位置する』、作品社、一九八一・一、一九二〇頁)

(54) 江藤淳と中上健次の対談、「今、言葉は生きているか」、河出書房新社、『文芸』、春季号、一九八八・二、二四九頁

(55) 『中野重治全集』、第三卷、「五勺の酒」、筑摩書房版、一九六一・八、二二頁

(56) 《中国は弱国であり、したがって中国人は当然に低能だから、自分の力で六十点以上とれるはずがない、こうかれらが疑ったとして無理はない。だが私はつづいて、中国人の銃殺されるのを参観する運命にめぐりあった。第二学年では細菌学の授業があつて、細菌の形態はすべて幻燈で映して見せるが、授業が一段落してもまだ放課にならぬと、ニュースを放映してみせた。むろん日本がロシアとの戦争で勝った場面ばかりだ。ところがスクリーンに、ひょっこり中国人が登場した。ロシア軍のスパイとして日本軍に捕えられ、銃殺される場面である。それを取りまいて見物している群衆も中国人だった。もうひとり、教室には私がいる。

〈万歳〉 万雷の拍手と歓声だ。

いつも歓声はスライド一枚ごとにあるが、私としては、このときの歓声ほど耳にこたえたものはなかった。のちに中国に帰ってから、囚人が銃殺されるのをのんびり見物している人々がきまって酔ったように喝采

するのを見た——ああ、施す手なし！だがこの時この場所で私の考えは変わった』（『文芸読本』、魯迅、

「藤野先生」、竹内好訳、一九八〇・九、二二五―二二六頁）

- (57) 『差別、その根源を問う（上）』、朝日新聞社、一九七七・一〇、または、『中上健次・1970―1978・全発言Ⅰ』所収、集英社、一九七八・一〇、三八九頁

- (58) 『解放新聞』中央版、一四〇三号、中・高校生にすすめる『名作 この一冊』、一九八八・一二・二六

付記

本稿で参照した資料の他、『同時代批評5《身体の復権》』（土曜美術社、一九八二・六）の梁石日氏、高野庸一氏の「中上健次論」や「流域文学会」の山本卓氏、磯島俊哉氏等の最近の「文学界の動向」にかかわる諸見解（一九八八・六）から多くの示唆を受けたことを付記しておく。

（一九八八・一二・三二）